



令和7年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

# 倭国と古代東アジア 交流と諸国興亡の時代

第3回 令和7年12月20日(土)

「古代韓日交流史 —韓半島諸国と倭国諸地域との  
「交流」と韓半島三国時代諸国の興亡—」

大韓民国慶北大學校教授 朴天秀 氏



福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田2-1-94 TEL: 092-571-2921 FAX: 092-571-2825

電子メール: maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

上の遺物写真是、公共ヌリ第1タイプで公開された大韓民国e뮤지엄 <http://www.emuseum.go.kr/main>から取得した画像を加工し配画した。所蔵品番号は左から신수156(慶州市出土黄金飾副心葉型耳飾)、신수1289(慶州市出土金製指輪)、전주56093(高昌郡出土圓筒形土器)、나주7487(ペノリ3号墳出土骨)、나주7488(ペノリ3号墳出土鏡)、무령23(ムリョン王陵出土獸帶鏡)。下半の遺物写真是ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)と、世界遺産「神宿る島」(宗像・沖ノ島と開祖達磨群デジタル・アーカイブ <https://www.munakata-archives.asia/frmDefault.aspx>)から取得した画像。福岡市埋蔵文化財センター所蔵画像を加工し配画した。右上から江田船山古墳出土獸帶鏡、沖ノ島出土金製指輪、江田船山古墳出土銜角付青、老司古墳出土甲冑、江田船山古墳出土金製耳飾、今宿大塚出土円筒埴輪。背景中央は韓国光州市明花洞古墳。

# 古代韓日交流史

朴天秀(慶北大學)

## はじめに

本稿では、古代韓日交流史の研究が両国の資料のみに限定されることを避け、東アジア的な視野に立った議論を開発することを目指しつつ、韓半島と日本列島の関係を地域間交流による相互作用の観点から捉え、3世紀から7世紀にかけての加耶、百濟、新羅、高句麗と倭との交流について考察する。その上で時期ごとの交流の背景や、その交流が相互にどのように作用したのかについて論じ、それらの考察を通じて、古代の日韓交流の歴史的意義について探求していきたい。

## 3~4世紀の韓日交流

『三国志』魏書東夷伝倭人条には「帶方郡から倭に行くには、海岸にしたがって水行し、韓国を経て北岸の狗邪韓国に行くのに7千余里、はじめて一海を渡って千余里で対馬国に到着する」と記され、帶方郡から南西海岸を経て倭に渡る最も重要な中継地点が金海地域に所在した狗邪国であったことが明示されている。

紀元前後の狗邪国では進永平野一帯に中心集落が形成され、そこには割竹形木棺を埋葬施設とし、筆、星雲鏡(前漢鏡)、漆器、五銖錢、漆鞘銅劍、鉄製品など楽浪との関係が強く認められる多数の遺物が出土した昌原市茶戸里墳墓群が営まれた。

2世紀初めを前後する頃になると、海岸沿いの金海平野から内陸の盆地である進永に行く交通路上に位置する良洞里古墳群一帯が、狗邪国を中心として著しい成長をみる。

『三国志』魏書弁辰条の「國で鉄を産出する。韓、漢、倭が鉄を手に入れて行く。市場の売買でも鉄を使用し、中国で錢を利用するのと同様で、また、樂浪、帶方にも供給した」という記録から推測を及ぼすと、良洞里 235号墳出土の北方系銅鏡、良洞里 322号墳出土の中国産銅鼎と日本列島産銅矛の存在は、鉄を媒介とした東アジアの交易が狗邪国を中心に行われていたことの証左と言えよう。

2世紀までの韓半島からもたらされた文物は、日本列島の関門である北部九州地域に集中して分布しており、それに呼応するように金海地域の広形銅矛や倣製鏡などの移入された日本列島産文物のほとんどは北部九州産であった。

ところが、3世紀になると韓半島産の文物が瀬戸内海を通じて近畿地方に集中的にもたらされ、同時に金官加耶地域でも北部九州産の文物に代わって近畿地方産の文物の移入が顕著になる。この時期に日本列島に移入された代表的な金官加耶産文物は、鉄鋌を含めた鉄製品である。金海市大成洞 1, 2, 3号墳、釜山市福泉洞 54号墳、金海市七山洞 20号墳の鉄鋌を見ると、4世紀後葉、金官加耶で製作された鉄鋌の形態を見ると両端部が直線的で、両側面に凹凸がない左右対称的な特徴を指摘できる。福岡県沖ノ島遺跡、福岡県割畠古墳、大分県下山古墳、兵庫県行者塚古墳、和歌山県丸山古墳などの鉄鋌は4世紀後葉の金官加耶産の鉄鋌と形態が類似することから、他の鉄製品とともに金海地域から移入されたものであるとみられる。

この他にも、日本列島に移入された金官加耶の文物としては、大阪府の大庭寺遺跡で明らかになった、それまでの伝統的な土師器とは異なる灰青色硬質土器を製作する新たな製陶技術を挙げることができる。また、灰青色硬質土器にはこれまで見られなかった器台類が含まれる。とくに大庭寺遺跡の代表器種である大形の器台は、釜山市福泉洞古墳群出土品と形態や製作技術が類似する点は重要で、これは、金官加耶様式の土器を製作していた陶工集団が日本列島へ移住し、須恵器という革新的な土器の創出に関与したことを示す。さらに行者塚古墳で出土した日本列島で最古段階に位置付けられる馬具は金海地域の大成洞古墳群の出土品と構造や製作技術が類似している点から、帶金具、鉄鋌、鉄鏡と共に金官加耶から移入されたものであると考えられる。

これに対して金官加耶に移入された日本列島産の文物としては、大成洞古墳群出土の巴形銅器、筒形銅器、石製品などが挙げられる。とくに筒形銅器は、金海、釜山地域だけで日本列島での出土総数約 70 点に匹敵する 80 点前後が確認されている。

金官加耶の王墓である大成洞 88 号墳では金銅製の晋式帶金具と巴形銅器が出土し、91 号墳では琉球列島産のイモガイで装飾した馬具、前燕で製作された金銅製馬具と青銅製の容器、ローマンガラスなどが出土した。これらの文物は金官加耶の国際性を雄弁に物語るものである。

このことは従来、中国との独自の交渉によって入手したと考えられてきた奈良県新山古墳と兵庫県行者塚古墳出土の金銅製晋式帶金具も、金官加耶を経由してもたらされたことを推測させる根拠になる。新山古墳には大成洞古墳群出土品と関連する石製品が、また、行者塚古墳には大成洞古墳群の出土品に類似する巴形銅器とともに金官加耶産の鉄鋤、鉄鎧が副葬されていた。特に新山古墳は、佐紀古墳群を造営した勢力と密接な関係にあったとされる馬見古墳群を構成する有力首長墓であるだけに、金官加耶王権と佐紀古墳群の造営勢力を中核とする倭王権との関係がうかがわれる。4 世紀前半に築造された新山古墳から出土した晋式帶金具は、西晋-前燕-高句麗-新羅-金官加耶-倭を結ぶ壮大な交易ネットワークの存在を象徴するものである（図 1）。

古金海湾に立地していた狗邪国は、先史時代以来、日本列島との交流における関門、基地としての役割を果たし、その交渉相手は北部九州勢力であった。その後、3 世紀後半以降の金官加耶の時期になると、日本列島の交渉窓口は畿内勢力に替わる。このような過程のなかで、金海地域では古金海湾西部地域の良洞里勢力が衰退して、古金海湾中央部を拠点とする大成洞勢力が主導権を掌握し、これに連動するように交渉相手である日本列島では纏向、柳本・大和古墳群を造営した奈良盆地の東南部勢力が衰退して佐紀古墳群を造営した盆地北部の勢力が台頭するのである。

大成洞勢力と佐紀勢力が共有する金官加耶産文物と日本列島産文物は、金官加耶、並びに畿内政権内部双方の権力交替に、韓半島と日本列島間の交渉が相互に強く関与していたことを暗示している。佐紀古墳群の造営勢力は、313 年、楽浪郡の滅亡で中国との交渉が途絶えたことを契機として衰退した奈良盆地東南部の勢力に代わり、金官加耶との交渉を通して鉄と金銅製の威信財を導入することで新しく優位性を確保し、倭王権内部での権力を掌握した勢力であったと想定される。

『日本書紀』神功 46 年条（366 年）には、斯麻宿禰が卓淳国に派遣され、卓淳王の末錦旱岐から百濟王が倭との通行を望んでいることを告げられた。同 52 年条（372 年）には、近肖古王が倭に七枝刀一口と七子鏡一面等、種々の宝物を贈ったことが記されるが、この七枝刀は奈良県天理市の石上神宮に伝わる七支刀に当たると考えられる。369 年における七支刀の伝来の背景については多くの議論がなされているが、この年に百濟は韓半島の南海岸西部の海南半島まで進出し、加耶の七国や倭との交渉を行う時期に重なることから、百濟と倭の交渉の記念物として贈られたものと考えられる。百濟側にはその後の高句麗との戦争に備えた倭との同盟関係を、より確実なものとしておく必要があったのであろう。

4 世紀末、百濟は旧楽浪地域の領土をめぐり高句麗と戦争を行うが、その都である集安に建てられた広開土王碑には、百濟からの要請を受けた倭の軍事行動の過程が次のように記されている。

「永樂九年己亥 百殘違誓與倭和通」（訳）“永樂九年 己亥年（399 年）、百殘（百濟）は誓いを破り、倭と通じた”これは『三国史記』の阿莘王 6 年、すなわち 397 年に百濟の阿莘王が広開土王碑の永樂 6（396）年条に見られる敗北を挽回するために、倭との同盟関係を築くために太子である腆支を倭に派遣したことと関連している。

このように高句麗と百濟・倭との関係が具体的に記された史料が存在する一方で、現在のところ考古資料からはこの記事を裏付けるような痕跡が明瞭に認められるとは言い難い。すなわち、この時期の日本列島における百濟の文物の移入も、また百濟地域における倭系の文物の存在も、ともに顕著ではないからである。

## 5 世紀の韓日交流

### 1. 百濟と倭

広開土王碑には 4 世紀後葉の高句麗に対する百濟と倭による軍事行動は、5 世紀初めにも継続したことが次のように記録されている。

「十四年甲辰 而倭不軌侵入帶方界。 [和通殘兵]□石城□連船□□□。 王躬率□□ 從平壤□□□鋒相遇。 王幢要截盜刺 倭寇潰敗 斬殺無數」

広開土王の永樂 9（399）年条には、百濟と倭が和通したことを記しているが、404 年には帶方界へ百濟と共に傭兵として動員された倭が侵攻した可能性が高い。

『三国史記』百濟本紀腆支王元年条（405年）には次のような記録が見える。阿莘王が死去すると、次弟の訓解が摂政を行いながら腆支の倭からの還国を待っていたが、末弟の磯礼が兄である訓解を殺害し、自ら王となつた。腆支が父阿莘王の訃報を聞き帰國を願い出たところ、倭王は百人の兵を護衛として百済へ送った。

これは『日本書紀』応神16年条にも、直支王（腆支王）が王位を継ぐために帰国する記事として見える。腆支は阿莘王3年（394年）に太子に冊立された後、397年に倭へ派遣され、滞在期間は9年に及んだ。彼の派遣目的は、倭国との同盟関係を構築し、高句麗との戦争による百済の危機的状況を開拓することであった。

ここでこの時期の考古資料に目を向けてみよう。南海岸西部の臨海部と島嶼では5世紀前葉に倭で製作された鉄製の甲冑を副葬した倭系の墓制をもつ古墳が突如として出現する。すなわち、新安郡ペノルリ古墳群と海南郡外島古墳群である。ペノルリ3号墳は従来古墳が作られなかった島嶼の間を通る水路に面するそれまで顕著な古墳が築造されなかつた小島に唐突に出現する。埋葬施設はこの地域には例がない石棺系竪穴式石槨であり、日本列島製の三角板革綴短甲と三角板鉢留衝角付冑を副葬している。外島1号墳では従来古墳が作られなかつた島に突如として2基が築造される。埋葬施設はこの地域では例がない箱式石棺であり、三角板革綴短甲が出土した。同じ時期、高興郡東部の海倉湾に面した丘陵上には吉洞里雁洞古墳が、同じように突如として単独で出現する。この古墳では日本列島製の眉庇付冑、頸甲、肩甲、長方板革綴短甲に、百済製の金銅製の冠帽や飾履が伴つて副葬されている点に特に注目する必要がある。なぜなら、5世紀前半の百済は、原州、天安、公州、瑞山などの各地域の首長に金銅製冠帽と飾履を賜与する威信財体系を確立していたからである。高興郡の野幕古墳は西側の得粮湾に面する丘陵に、やはり突如として、単独で築造される。埋葬施設はこの地域には例がない石棺系竪穴式石槨であり、同じように三角板革綴短甲を副葬している。

このような倭系とされる古墳は、周辺の在地首長の系譜の古墳とは無関係な分布域に突如として出現するが、後続する古墳を持たない一世代のみの造墓である点、日本列島製の甲冑や武器を副葬している点から、被葬者は倭人であると考えられる。また、すべての古墳が百済の領域である南海岸地域に築造され、高興郡吉洞里雁洞古墳では百済が地方の首長に下賜する典型的な威信財を副葬していた。このように百済製の冠帽と飾履が副葬されている点を考慮すると、その被葬者は百済によって各地の軍事上、交通上の要衝に配置された武人集団の首長の役割を果たしていた可能性が極めて高い（図2）。最近確認された莞島郡青山島の堂里古墳は従来古墳がつくられなかつた島の、港にふさわしい湾を見下ろす丘陵に突如として単独で築造される。この古墳では日本列島製の大刀と鉄鎌を副葬していた。この島は陸地から30km離れたところであり、韓半島南西部の沿岸航路とともに島々を行き来する航路の要地と言える位置にあることが特に重要である。また、青山島は莞島から済州島に行く航路上に存在することから、この古墳の被葬者は済州島の耽羅勢力を牽制する役割をもつて配置された人物であるとも考えられる。

野幕古墳の埋葬施設は石棺系竪穴式石槨であり、福岡県の七夕池古墳などと構造が類似することからみて、被葬者は北部九州に系譜をもつ倭人であると考えられる。これらの人物は、405年頃に腆支王の百済帰國に従つて当地へ来た倭軍の一部が、その後も帰還せずに百済王権の軍事機構の中の首長として南海岸一帯に編成され、ついには異土であるこの地に埋葬されることになったと推定される。

この時期の倭系古墳の被葬者は、広開土王碑に“永楽14年（404年）に百済と倭の連合軍が帶方界を攻撃した”と銘文として刻まれた高句麗戦に参加していたと考えられる倭の武人に他ならない。これに関しては臨津江流域の百済土城である京畿道坡州市舟月里六溪土城から、日本列島製の三角板革綴短甲と共に高句麗土器が出土していることが注目される。この遺跡は高句麗軍によって占拠されたと考えられており、日本列島製の板甲が出土したことは広開土王碑の永楽14年（404年）の倭との交戦の記事を証明するものとされている。

天安の求道里古墳は石棺系竪穴式石槨を埋葬施設とし、三角板革綴短甲を副葬した倭系の古墳である。この古墳は北東に鎮川の盆地、南東に清州の盆地が近い百済王都の防衛線とも言える天安地域の軍事上、交通上の要地に位置していることからみて、百済東部の防衛を担当し、また対新羅戦のために配置された倭の武人の墓と推定される。つまり、この時期の倭系古墳の被葬者が、百済の軍事組織の中の重要な位置にも編成され、百済王権の意図により各地の軍事的拠点に配置されたことを示す証拠となる。

さらに軍事的な意味に加え、倭系古墳の築造場所が5世紀前半の百済において南海岸と西海岸を結ぶ海上交通の要衝に位置している点も重要であり、その被葬者は『宋書』倭国伝に記録された421年、425年、430年の倭王による対宋遣使の際にも、航海や補給など交通上の一定の役割を担つたと考えられる（図3）。

最近では発掘調査が行われた京畿道成南市の福井洞遺跡では、百済王室の工房で日本列島から移住した工人によって埴輪が製作されたことが確認され、これまでの百済と倭の関係に再考を迫る重要な事実が明らかになつた。この遺跡では数量や器種の上でも本格的な埴輪製作が行われ、ソウルの百済王城である風納土城出土の埴輪はこの遺跡から運ばれたと考えられる。さらに百済の中枢部の首長墓級の古墳に供給され、実際に墳丘上に立てて使用されたものと考えることができる。このことは、漢城期の百済では、いくつかの首長墳を造営する程度の数の

倭人が、百濟の王都に近い地域に本拠を置いて活動していたことを示唆するものであり、これまで史料や考古資料に表れなかつた重要な事実が明らかにされる可能性がある（図4）。

一方、『日本書紀』応神15(405)年条には百濟王が馬飼と經典の知識に優れた阿直岐を倭へ派遣し、翌年には王仁が派遣されて太子の師となつたという記録があり、この時期、百濟によって馬飼の技術や、儒学が伝來したことが分かる。これらは404年の百濟と倭の共同による高句麗に対する攻撃、405年から406年にかけての、阿莘王の死去から腆支王の即位までの間に起つた王権内部の混乱などに際した百濟と倭の王権との緊密な関係を背景とする文化交流であったと考えられる。

そしてこの時期、日本列島の中の北部九州では、それまでの竪穴式石槨や粘土槨に加えて、構造や埋葬方法をまったく異なる横穴式石室が突如として出現することが注目される。すなわち、福岡県の老司古墳や鋤崎古墳などが、代表的な事例として挙げられる。横穴式石室の出現の背景についてはよく分かっていないが、これら北部九州の初期の横穴式石室は床に段差を設ける玄門構造で、その特徴は原州市の法泉里4号墳などと同様の構造であることが注目され、北部九州の首長たちが百濟の墓制を受容したことを示している。これは4世紀末以来、南西海岸へ移住し、現地で活動していた北部九州に出自を持つ倭人が、引き続き連絡や往来の関係を保つていたからこそ百濟で成立していた横穴式石室を、みずからの故地に首長の墓制としての導入されるに至つたことの背景にあつたと考えられる。

## 2. 新羅と倭

5世紀になると4世紀代に見られたような日本列島への金官加耶産文物の移入と、これとは逆方向の現象である金海地域への日本列島製威信財の移入がおこなわれなくなる。このことは金官加耶で最有力の大成洞古墳群で王墓と呼ぶにふさわしい内容を有する墳墓が認められなくなるほど造営活動が衰退し、この時期『三国志』魏書東夷伝弁辰条に記されたこの地域を中心とした市を中心とする国際的な鉄の流通システムが崩壊することに直接に関連した現象である。

その一方で5世紀以後の日本列島では、それ以前に移入されていた金海加耶地域産の鉄鋌に替わって、形態や規格が異なる新羅産の鉄鋌が主として持ち込まれていることは重要である。

新羅で製作された鉄鋌は慶州市月城路カ6号墳と慶山市林堂洞G5・6号墳の出土品などから見て、両端部が凹形の弧状で、両側面に凹凸がある非対称形である点が形態上の特徴である。日本列島での代表的な例は奈良県大和6号墳出土大型鉄鋌である。大和6号墳は巨大前方後円墳が集中する奈良県北部の佐紀古墳群の中で、後半期に築造された推定全長270～280mのウワナベ古墳の陪塚で、大型282枚、小型590枚ものおびただしい数の鉄鋌が出土しており、その数は1,332枚の鉄鋌が副葬された慶州市皇南大塚南墳の出土数に匹敵する。大型鉄鋌の中で長さ40cm前後のものは5世紀中葉の皇南大塚南墳出土品と形態が類似するもので、両端が弧状を成して両側面に凹凸がある、左右が非対称形の新羅産の鉄鋌の特徴が認められる。この大型鉄鋌はこれまで釜山市福泉洞21・22号墳出土品と類似することから、金官加耶産と判断してきたが、福泉洞21・22号墳の鉄鋌は、同古墳群のそれより以前の墳墓に副葬された両端部が直線を成し両側面には凹凸がない左右対称形の金官加耶産の鉄鋌の形態的特徴からは明らかに逸脱するものである。福泉洞21・22号墳では新羅様式の土器と新羅製の金銅製盛矢具、鑿頭形の新羅型鉄鋌が共伴することから、大型鉄鋌も同じように新羅から供給されたと判断できるものであり、形態が共通する大和6号墳出土の大型鉄鋌は新羅産と考えるべきである。ちなみに福泉洞古墳群出土の鉄鋌の成分分析では、形態から新羅産鉄鋌と考えられる39号墳のものは、昌寧地域の出土品や大和6号墳と同じく銅成分が高いという分析結果があり、これら一群の鉄鋌は新羅地域のものと産地を同じくする鉄鉱石を使用した可能性が高い。つまり、福泉洞古墳群では4世紀前葉の福泉洞54号墳までは金海加耶産の鉄鋌が副葬されていたが、4世紀後葉の福泉洞21・22号墳を前後した時期を画期にして新羅産の鉄鋌がこれに替わるのである。この転換は福泉洞古墳群を代々の王墓とする釜山地域の勢力の交渉の対象が、金官加耶から新羅へ交替したことを如実に反映するものである。

大和6号墳出土の小型鉄鋌も、両端が弧状を成して両側面の凹凸が顕著な非対称的の形態と規格が、慶州地域で製作された鉄鋌と類似していることから、大型鉄鋌とともに新羅から供給されたものと考えられる。それとともに、これまで加耶産と見なされてきた福岡県沖ノ島正三位社前遺跡、愛媛県出作遺跡、大阪府野中古墳、兵庫県宮山古墳、岡山県窪木薬師遺跡などの中小型鉄鋌も、形態と規格が慶州地域出土品と類似することから新羅産と判断するべきである。これらの資料は日本列島地域への鉄鋌の供給元が、5世紀初めを画期として、従来の金官加耶地域から、新羅に転換したことを物語るものである。5世紀初頭の金官加耶の衰退によって生じた交渉相手の空白期に、それまでは倭と敵対的関係にあった新羅の文物の日本列島への活発な移入を來す韓半島南部と倭との対外関係の大きな変化があつたことを強調したい。

5世紀前半の代表的な新羅製の金工品として大阪府の古市古墳群の中の誉田御廟山(伝応神陵)古墳の陪塚である誉田丸山古墳出土の金銅製の龍文透彫鞍金具、鏡板轡と滋賀県新開1号墳出土の龍文鏡板轡を挙げる。誉田丸山古墳の龍文金銅製鞍金具は、製作地を中国東北地方や高句麗、新羅、加耶、あるいは日本列島などに比定するさまざまな見解がある。少なくとも韓半島南部地域や日本列島で出土する鞍金具の構造は中国東北地方で出土するものとは異なるので、誉田丸山古墳の出土品を含む日本列島で出土するこの時期の鞍は、中国東北地方で製作されたとは考え難い。

誉田丸山古墳出土の鞍金具は慶州市皇南大塚南墳と伝大邱市玄風邑の出土品に類例があり、そこに施された透彫龍文の類例が皇南大塚南墳、江陵市草堂洞A-1号墳、慶山市林堂洞7B号墳などから出土した金銅製の帶金具や盛矢具にも確認される。この時期には他にも新羅製の馬具などの金工品が数多く移入されていることを勘案すると、誉田丸山古墳出土の馬具は新羅で製作され、倭王権の中枢部に直接もたらされたものと判断される。同時期の日本列島各地に出現した大阪府鞍塚古墳、同御獅子塚古墳、滋賀県新開1号墳、岐阜県中八幡古墳などの鉄製の鞍と鐙などの組み合わせによる馬具が新羅産であることもその傍証となる。

これとは逆に、日本列島産の硬玉製勾玉が新羅に流入することに注目する必要がある。

三国時代の硬玉製勾玉は、韓半島内で同種の石材産地が確認されない点、材質と製作技法が類似する点、日本列島で製作されたものと判断される。特に皇南大塚北墳、天馬塚、金冠塚、瑞鳳塚で出土した金冠には、それぞれ77個、58個、58個、41個もの最上級と言える硬玉製勾玉が垂飾として装着されており、新羅独自の意匠による威信財としての豪華さを高める効果を發揮している。

5世紀前半には、4世紀まで金海加耶地域から供給してきた鉄鋌が新羅産に替わったが、それと時を同じくするように新潟県糸魚川産の硬玉製勾玉で装飾した金冠が、新羅王都の王陵級の古墳に副葬される。新羅の王墓を含む積石木槨墳には、東アジアの諸地域には他に例を見ない多くのガラス製品が集中的に副葬されていることが、紛れも無い事実として認められている。5世紀中葉～6世紀前葉の短い期間に築造された王陵と王族墓を中心に構成される大陵苑古墳群では、皇南大塚南墳の7点をはじめとして、これまで発掘調査されている7基の古墳だけでも、じつに25点ものガラス器が副葬されており、未発掘の周囲の王陵、王族墓の副葬品を加えれば、その数は100点をはるかに上回ると推定される。

西方地域から新羅へのローマガラス器の搬入経路としては、モンゴルのゴルモド(Gol-mod)II匈奴墓からの出土品によって、すでに1世紀には「草原の道」が形成されていることが知られる点、中国遼寧省にある北燕の馮素弗墓と副葬品が新羅古墳のものと類似している点、馮素弗墓の出土品がモンゴル高原一帯を支配していた柔然を経由した点などから見て、オアシスの道の一つである天山山脈の北側を通る天山北路よりも、モンゴルを経由する「草原の道」とみるのがより妥当と思われる。つまり、新羅のローマンガラス器は東ローマ - フン(Hun) - 柔然 - 燕 - 高句麗、すなわち中央アジアのからモンゴル高原、高句麗を通って新羅へ至る、1万数千kmの距離を経て搬入されたのである(図5)。

次に日本で出土したローマンガラス器の移入経路と歴史的背景について見てみよう。奈良県新沢千塚126号墳では小規模な方墳であるにもかかわらず、シルクロードを経由してもたらされた東ローマ産と考えられる透明のガラス碗と青色のガラス皿の2点が、龍文を透かし彫りにした冠金具や垂式付耳飾、螺旋状の垂飾、腕輪、指輪などの最高級の金製装身具とともに出土した。新羅の王陵級古墳にはガラス器の副葬が稀ではないことと、これに加えて新沢千塚126号墳の金製装身具が形式や製作技術からみて新羅製であることが明らかのことから、その被葬者は新羅から移住した王族を含む貴族層に属する人物として判断する。

ところで、新沢千塚126号墳と同じ時期に築造された大阪府大仙(伝仁徳陵)古墳の前方部に設けられた石槨から、金銅製甲冑と共に発見されたことが記録で明らかな、白色の皿と紺色の碗の2点のガラス器は、新沢千塚126号墳出土のガラス器と器種の組み合わせが一致している。ガラス器が副葬された前方部の埋葬施設は後円部に造られている中心の埋葬施設の主被葬者に対して従属的な立場にある人物を陪葬したものであり、後円部の埋葬施設ではさらに多数のガラス器が副葬された可能性が高い。なぜなら慶州大陵苑古墳群では王墓である皇南大塚南墳の7点に対して、周辺の陪塚には2～4点程度のガラス器が副葬されるという関係が認められるからである。5世紀における日本の王墓群である古市古墳群と百舌鳥古墳群には、新羅を経由して渡来した西方のガラス器が数多く副葬されたことが想定できる。

ところが、5世紀後葉に築造された慶州大陵苑古墳群の皇南大塚北墳では、突如としてササン朝ペルシアガラス器の副葬が始まる。この切子文碗は口縁部を研磨して平らに整形し、体部と底部の表面全体に円文を切削して施す特徴からササン朝ペルシア産と判断される。このササン朝ペルシアガラスは、東ローマからシルクロードの「草原の道」を辿って柔然を経由して運ばれたローマンガラスと異なり、イランから「オアシスの道」を通じて運ばれ、北魏を経由しておよそ8千kmの長い旅の果てに新羅へ搬入された可能性が高い。ペルシア産のガラス器は王たち最有力者層に珍重されることとなり、ついには皇南大塚北墳に葬られた王妃の身辺に納められることになった。

北魏の首都があった現在の大同地域の墓からササン朝ペルシアガラスが多数出土していることから、そこは高句麗から新羅に至るルートの中継地の役割を果たしていたと考えられる。

このような5世紀後葉に起こった慶州地域の古墳に副葬されるガラス器の転換は、新羅に搬入されたガラス器の産地と経路に変化があったことを示している。それを端的に示す皇南大塚北墳出土の切子文碗は、5世紀中葉のユーラシア情勢の劇的な変動を反映する物証に他ならないのである。筆者はこの時期を前後して、新羅に搬入されるガラス器の入手先がフン(Hun)帝国から、現在のイラク、イランを中心として勢力を拡大しつつあったササン朝ペルシアに交替したと考える。この背景には「草原の道」を支配した遊牧騎馬民族のフン(Hun)帝国の崩壊の影響が強く認められる。フン帝国は東ローマ帝国の領域にまで圧迫を加えていたが、453年、王アッティラ(Attila)の突然の死により急速に崩壊し、これによって東ローマ帝国とシルクロード各地に形成されていた交易網も衰退する。フン(Hun)に代わってユーラシア・シルクロードのガラス交易を掌握したのはササン朝ペルシアである。その結果、5世紀後半にはシルクロードの「砂漠の道」と「海の道」を通じて、ササン朝ペルシアの文物がユーラシアの東部、中国にまでもたらされることになるのである(図6)。新羅はこの時、北魏と頻繁に交流していた高句麗との外交関係を背景に、高句麗を介してササン朝ペルシア文物を受け入れることになった。その文物交流の道は海を渡った日本列島まで及ぶが、その一端を示すのが古市古墳群の中の高屋築山古墳(伝安閑陵)で江戸時代に出土したことが記録に明らかなササン朝ペルシア産の切子文のあるガラス碗の存在である。

ところが、皇南大塚北墳に続く6世紀前半に築造された新羅古墳では、伝世品と考えられるローマンガラス器の副葬は確認されているが、この時期、中国に活発にもたらされているササン朝ペルシアガラス器は見当たらない。筆者は現在、この時期の王墓を含む王族墓の発掘が実施されていないことに、その理由があると考える。

新羅にペルシアガラスが移入されたことの根拠になるのは慶州市飾履塚の2点、金冠塚の1点、仁王洞C1号墳の1点、大陵苑チョクセム41号墳の1点など、6世紀前半の新羅古墳で出土したモザイクで装飾された二重円文ガラス玉の存在である。これらのガラス玉は、断面が同心円のモザイク模様を呈する、色調の異なるガラス棒を切り取って貼り付ける高い技術で製作されたもので、イラン北部カスピ海沿岸地域での出土品に見られる、ササン朝ペルシアの系統であることが明らかな希少品である。

これらと同じような方法で製作されたガラス玉は、新疆ニヤ(尼雅)遺跡1号墓地3号墓出土例のほか、最近では山西省大同市東信家居広場2期北魏墓から2点出土したことが知られた。したがって、6世紀の新羅古墳から出土する二重円文ガラス玉は、ササン朝ペルシアから「砂漠の道」を辿って北魏に搬入された後、高句麗を介して新羅にもたらされたことが分かる。さらに、このガラス玉は新羅から日本列島にまで運ばれたことを香川県盛土山古墳、同安造田3号墳、宮城県追戸横穴墓からの出土が明らかにしている(図7)。

5世紀初頭以降の新羅王権と倭王権との交渉は、金官加耶の衰退後、日本列島との交易を活発にすることで、従来の敵対的な関係を開拓しようとした新羅の意図が強く働いたと考えられる。このような新羅の対倭関係の方針転換に呼応するように、金官加耶の衰退以後、韓半島産の鉄資源やそこで製作される各種の威信財や鉄製品、特に新羅製の金工品のようなすぐれた文物や、はるか西方から運ばれ集積されていたガラス容器などの希少な優品を入手するため、新たな交渉相手としての新羅の存在を重視するという倭の外交戦略が一致したことが考えられる。5世紀前半、倭が強く欲した鉄や金、さらに西方産の文物を豊富に持つ最も近い国は新羅にほかならない。この時期に新羅に通じる瀬戸内海の海上交通を掌握し、有利な地理的条件をもつ河内を拠点とする勢力の倭王権の内部での飛躍的な発展は、新羅との独占的な文物交流が結実したものといつても過言ではなかろう。

言うまでもなく、そこには文物にとどまらない人的な交流があったことも見逃すべきではない。『日本書紀』応神31年(420)条、同仁徳11年(443)条などにみられる新羅人技術者の派遣記事は、新羅から倭への文化の伝播が伴った、人的交流を目的とした政治的な交渉を示唆している。とりわけ『日本書紀』允恭紀には加耶や百濟との交渉の記事がまったく認められないにもかかわらず、新羅との交渉記事だけが記録される点は注目に値する。すなわち、允恭3年条の新羅への使節派遣とそれに対する医者の派遣と帰国、允恭42年条の新羅からの弔問団の派遣記事は、当時の新羅と倭の友好的な関係を示している。新羅と倭王権との政治的な外交関係は、緊張や敵対、友好や利害が交錯する両面性を持っていたことがわかる。

さて、新羅と倭王権との関係を考える上で注目するのは、4世紀末の王墓が造営された河内(大阪平野)の古市古墳群の中にあって、中小規模の階層にあたる鞍塚古墳の副葬品に新羅製の馬具があらわれるのに対して、慶州の月城路力13号墳で26点に達する日本列島産の硬玉製勾玉が出土していることである。月城路力13号墳は2点のローマンガラス器と共に金、銀器を副葬しており、王墓の周辺に造られた王族クラスを被葬者とする古墳である。

このことは、新羅と倭王権を構成する河内を基盤とする勢力との交渉が、すでに4世紀末に始まった可能性を示唆する。つまり、金官加耶と佐紀古墳群を築造した奈良盆地北部を基盤とする佐紀勢力が交渉を継続している一方で、新たに新羅と古市・百舌鳥古墳群を築造した大阪平野南部を基盤とする河内勢力との交渉が成立したことが推測されるのである。その結果、倭王権の内部に金官加耶と交渉を行ってきた佐紀勢力と、新羅との交渉を

重視する河内勢力との拮抗が生じる中で、韓半島におけるそれぞれの交渉相手の盛衰が、両勢力の均衡に大きな変化をもたらすことは想像に難くない。

このように、4世紀末の倭王権の中核を構成する、それぞれ奈良盆地北部と大阪平野南部を基盤とする二大勢力は、金官加耶と新羅を各々の交渉相手としていたが、その交渉相手の盛衰が倭王権内の勢力の交替にも決定的とも言える影響を与えたと考えられる。その原因の一つには広開土王碑が記す400年の高句麗南征であり、金官加耶に替わる新羅の台頭をもたらしたが、その結果、それぞれと同盟関係にあった倭王権内部の佐紀勢力の衰退と河内勢力の王権を掌握をもたらした。特に佐紀勢力の衰退は広開土王碑が記す400年の高句麗との戦争に直接参戦し、敗退したことが最大の原因であろう。福岡県沖ノ島出土の石製品などはその性格から佐紀勢力の参戦を雄弁にもの語る。

したがって、筆者は倭王墓と考えられる各時期の最大級の前方後円墳の造営地が奈良盆地北部から大阪平野南部へ移動したのは、単なる王墓域の移動としてではなく、政権の交替の結果として捉えている。さらに、5世紀において超大型前方後円墳を継続的に造営した河内政権の隆盛は、新羅との交渉によって不可欠の物資である鉄や威信財である金製品を獲得し、先進の技術を持った工人や知識人、さらには遙かに離れた西域の珍宝を受容できたことが重要な背景にあったと考えられる。

それとともに重要なのは、5世紀前半における新羅と倭の積極的とも言える交渉は、その当時、新羅を圧迫していた高句麗に対する牽制の意味を合わせ持っていたとも考えられることである。なぜなら、5世紀中葉、すなわち高句麗が新羅王都から撤退する時期になると新羅からの文物は日本列島に搬入されなくなり、にわかに大加耶産の文物がこれに替わる交易の対象となるからである。

### 3. 加耶と倭

5世紀中葉の大加耶は慶尚北道高靈を拠点に成長し、黃江水系、南江中上流域、蟾津江水系、南海岸、錦江上流域に及ぶ広域圏を形成して、加耶史上、画期的な発展をみせた。こうしたなか、大加耶が南江上流域に進出した直後から、その文物が日本列島で出現する点が特筆される。福井県二本松山古墳で出土した政治的地位を象徴する威信財としての金銅冠やまた、日本列島全域で出土する熊本県江田船山古墳出土品を典型例とする金製垂飾付耳飾が大加耶産であることは、5世紀後半、大加耶が倭との交渉において中心的な役割を果たしていたことを示している（図8）。また、新羅産馬具に代わって移入された金銅製f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉のセットも同様である。

この時期のものとして長野県と宮崎県で埋葬された馬は、ほとんどが大加耶産の馬具を装着しており、大加耶から馬飼の知識が導入されたことが考えられる。その一方で、これまで日本列島産文物が見られない内陸の大加耶圏への、倭系文物の集中的な移入が明らかに認められる。

4世紀までの金官加耶産文物と、5世紀前半までの新羅産文物に代わり、それらと比較して優勢ではなかった大加耶産文物の日本列島への流入が5世紀後半になって大量に流入し始めることの背景の一つには、大加耶が南海一帯の制海権を掌握し、百濟と倭の間の通交だけではなく、倭の中国への通交にも一定の影響力を行使するようになつたことが考えられる。

大加耶は5~6世紀の加耶諸国の中で、独自の意匠を持つ金工品を製作した唯一の国家であった。特に、高靈地域で製作された金銅製龍鳳文環頭大刀、金製垂飾付耳飾、金銅製馬具は、加耶全域だけでなく日本列島の各地に広く移出された。

現在確認されている大加耶産の金工品は、金冠2点、金銅冠5点、さらに金銅製龍鳳文環頭大刀は50点、金製垂飾付耳飾は250余点に達する。そのほか、金銅製馬具も多数確認されている。数百点に及ぶ豪華な大加耶の金工品は、百濟や新羅に匹敵する独自の文化を象徴するものである。

大加耶産金工品の数量は新羅こそ及ばないものの百濟産金工品の数量を上回り、新羅や百濟と明確に区別される独自の様式と製作技術を有している。さらに、領域内には高靈から星州へと続く、現代まで採掘が続くほどの良好な金鉱脈が存在し、金鉱の開発を基盤とした金工品の生産と交易が大加耶発展の原動力となったと考えられる。

479年、南斎に遣使した大加耶の荷知王の墓と推定される池山洞44号墳では約40名が殉葬されているが、奄美大島産の夜光貝製の柄杓が副葬されていた。これは、大加耶王権と日本列島を超えた遠隔地交易が行われていたことを示唆するものである。

5世紀後半、日本列島内の有力首長墓である東日本の群馬県井出二子山古墳、埼玉県稻荷山古墳、近畿地域の和歌山県大谷古墳、西日本の熊本県江田船山古墳などにおいて、大加耶系の威信財が副葬されている。その中で注目されるのは、大加耶の文物が集中して副葬された熊本県江田船山古墳と埼玉県稻荷山古墳で象嵌銘文大刀が出土していることである。これに関連して、環頭の内縁に刻目文が施された大加耶産と推定される東京博物館所

蔵の龍文環頭大刀にも象嵌銘文が施されているのが注目される。なぜなら、この龍文環頭大刀の書体と象嵌技法が、稻荷山古墳の銘文鉄劍にきわめて類似しているからである。5世紀後半の日本列島における銘文大刀の製作に、大加耶からの移住工人が関与していたことを示唆する。

一方、6世紀前葉になると百濟が任那四県と多沙津を占領し、大加耶は南海岸の制海権と交易港を失う。これに伴い、百濟産文物の本格的な日本列島移入が始まり、大加耶と日本列島の交易が減退した。

## 6世紀の韓日交流

### 1. 百濟と倭

6世紀初頭、日本列島に舶載される文物の供給元が大加耶から百濟へと転換し、これに呼応し合うように加耶地域に移入されていた倭系文物は百濟支配下の栄山江流域に集中的な分布の場を移す。この時期には日本列島内での鉄生産が始まり、加耶・新羅地域の鉄素材に対する依存度を低下させる一方で、国家体制の整備を目指す上で必要不可欠な儒学や仏教などの先進的な文化や文物を百濟から将来する必要があった。

こうしてもたらされた百濟系の考古資料としては、まず大阪府高井田山古墳に代表される横穴式石室の墓制を挙げることができる。横穴式石室では飲食物を供獻するための須恵器や、カマドやコシキのようなミニチュアの炊飯具が副葬される点から、百濟の繼世思想が新しい墓室構造に伴って導入されたことがうかがえる。それまで見られなかった夫婦合葬が始まるのも、百濟の影響によるものと見られている。特に百濟系横穴式石室の分布が近畿地方を中心に列島各地へ急速に拡散することも、6世紀前半の百濟文化が日本列島に与えた影響の大きさを示している。

もう一つこの時期に導入された百濟関連のものとして、馬を飼育し利用する馬の文化が挙げられる。この時期、韓半島では栄山江流域に前方後円墳が出現することが既に明らかになっており、最近発掘された靈岩郡月池里帆立貝形墳を含めて17基が確認された(図9)。これらの前方後円墳は在地首長系列とは無関係に突然出現し、造営が1世代に限られる点、墳形や埴輪祭祀、石室、副葬品が倭人固有の墓制にともなうものである点を考慮すると、被葬者を在地首長とみなすのは困難である(図10)。いまでも在地首長説は韓日両国で根強く残っているが、栄山江地域の前方後円墳は日本列島における渡来人の墓、すなわち新羅人の墓にもかかわらず方墳で箱式木棺に埋葬された奈良県新沢126号墳と比較するとほとんどその墓制に変容が見られず、その被葬者が倭人であるのはもはや議論の余地がない。特に前方後円墳のみではなく帆立貝形墳も確認されていることは重要で、倭における墳丘形式の意味を理解する人によって造られたことが裏付けられる。

栄山江流域の前方後円墳の被葬者は、腰石と玄門立柱石をもつ石室構造などから考えると、周防灘沿岸、佐賀平野東部、遠賀川流域、菊池川下流域など九州地域に出自をもつ倭人と判断される。これは、三斤王が死去したのち、東城王の帰国を筑紫国の軍士500人が護衛したという『日本書紀』雄略23年(479年)の記録と一致する。栄山江流域の前方後円墳造営時期が熊津期にあたることを考慮すれば、被葬者らは470年前後に百濟に渡った九州の首長層であったと考えられる。彼らは百濟から帰国せずに百濟王権に仕えて栄山江流域に残留し、その地に埋葬したと推定される。

また咸平郡礼徳里の新徳古墳に副葬された複数の日本列島製の大刀や甲冑の存在を評価すれば、栄山江流域の前方後円墳をはじめとする倭系古墳の被葬者たちは、戦士集団の首長であったとみられる。

咸平郡長鼓山古墳に隣接する咸平金山里方墳では、日本列島の古墳の墳丘に立てる形象埴輪が墳丘の下端で確認されたことが注目される。この古墳の墳丘に立てた人物形・馬形・鳥形の形象埴輪は、その形態とハケ目から見て、すべて日本列島から移住した工人によって製作されたものと判断できる。これは、長年里長鼓山古墳と同時期の周辺の集落である老迪遺跡の住居址から、表面が薄い木板(ハケ状工具)で調整された円筒埴輪が出土しており、集落内で倭人が埴輪の製作に関与していたことが分かる。金山里方墳の形象埴輪は日本列島での種類の構成や配置のあり方を忠実に反映したものであると言える。金山里方墳の形象埴輪には人物・鹿・豚を模したものもあり、これらは日本列島古墳で生前の首長が行った儀礼の場面を表現したり、首長の権威を象徴するために立て並べたものであり、倭人の有力者が前方後円墳以外の古墳に埋葬されたことが推測される。

栄山江流域の前方後円墳には日本列島との関係が指摘できる一方で、百濟中央と関連する文物の副葬があることも見逃せない。例えば、新徳古墳で出土した金箔ガラス、棗玉、雁木玉などで構成された首飾は、王都熊津の武寧王陵で出土したものと一致する。また、銀被鉄釘と鎧座金具が使用された装飾木棺は百濟地域の首長墓で使われたものである。新徳古墳の三連式轡とセットになる半球形花弁装飾雲珠などの馬具も百濟中央で製作されたものと考えられる。装飾木棺を含むこれらの文物は百濟中央との関係なしには入手し得ないものであり、百濟王室からの下賜品と判断される。一方、二山式冠と捩り環頭大刀はその性格から倭から持ち込んだ威信材である。

光州市月桂洞古墳でも新徳古墳と同じく百濟産の銀被鉄釘と鏗座金具を用いた装飾木棺の使用が確認された。装飾木棺は益山市笠店里、公州市梧谷里古墳などの百濟の地方首長墓で採用されたものである。新徳古墳と月桂洞古墳における装飾木棺は百濟王権に対する前方後円墳被葬者の直接的な従属関係を示す有力な手掛かりとなる。加えて海南郡竜頭里古墳と咸平郡馬山里杓山古墳からは、中国南朝産の錢文陶が出土して注目される。錢文陶などの中国南朝産の陶磁は、百濟中央から広く地方に分与されており、その被葬者は百濟の威信財システムに組み込まれていたと想定される。

公州市丹芝里の横穴墓群は、三国時代における墓制の中にはその系譜を見い出せない。九州の周防灘沿岸や遠賀川流域の横穴墓と構造が類似し、須恵器あるいはその模倣土器が副葬されていることから、被葬者は北部九州地域の倭人と推測される。

栄山江流域における前方後円墳の出現過程とともに注目したいのは、その分布のあり方である。この地域の前方後円墳は分布のまとまりをもたず、1つの盆地や水系に1基ずつ分布しており、それに継続する古墳は築造されないという特徴がある。光州市月桂洞古墳のように2基の前方後円墳が並んで存在する例もあるが、その場合にほぼ同時期に築造されていた。

特にこのことは栄山江流域における前方後円墳をいわゆる任那日本府によるものとみる見解を否定する決定的な証拠である。なぜなら前方後円墳が任那日本府が成立したという4世紀後半に出現せず6世紀初に出現し、政治的な中心を形成せず分散的に配置されたためである。

これら栄山江流域での前方後円墳の出現には、百濟の王候制のような地方支配との関わりが想定される。王候制は5世紀後葉の『南齊書』などに見られるように、熊津遷都後の百濟王権が各地方に王候を分封し支配を行う制度である。この王候制の中で見られる地名の中で面中は光州地域に比定されていることや、498年『三国史記』東城王20年における同じく光州に比定される武珍州の巡行記事は栄山江流域の前方後円墳の意味を考える上で特に興味深い。その理由は両史料が示す光州地域では月桂洞の2基、明花洞の1基が、また周辺の潭陽地域にも古城里古墳と声月里古墳の2基の前方後円墳が集中することが現在、確認されているためである。このように史料の上からも、栄山江流域における前方後円墳の被葬者は王権の支配を受けることなく自立、割拠した勢力ではなく、百濟王権に従属してその意図のもとに地域経営を認められた存在であったことが裏付けられる。

以上、前方後円墳の被葬者については、前方後円墳が百濟熊津期の後半に限定的に築造されている点、意図的に分散して配置されている点、百濟の威信財が副葬されている点から、倭系百濟官人であったと考える。

熊津期の百済による栄山江流域への倭人の派遣は、既存の秩序を崩すために在地的な基盤がない外部勢力を植民する高句麗の楽浪・帶方に対する支配方式と類似し、百済の間接支配から直接支配へと移行する過度期的な支配方式であろう。

栄山江流域に倭人が派遣された直接の要因には、漢城陥落によって一時的に統治機構が瓦解した百済が熊津に遷都したのち、自力で南方を統治するだけの力量を失っていたこと、高句麗との戦いや任那四県などをめぐる大加耶との戦いに動員する軍事力を必要としたことなどが挙げられる。このことは倭系古墳の副葬品に武器・武具が圧倒的多数を占める点からも裏付けられる。

最近、海南郡長鼓峰古墳に近接するゴチルマ土城では、同時期の首長居館が確認され注目されている。その建物の構造は方形壇上に長軸9.7m、短軸3.9mの正面5間、側面2間の長方形平面の二階建て掘立柱建物で、奈良県南郷遺跡極楽寺ヒビキ遺跡の大型建物と類似する点が指摘される(図11)。長鼓峰古墳とゴチルマ土城は古代の地形から見て、南海を航行する船舶から望まれるランドマークとしての役割を果たしたと推定される。

6世紀初頭から百済地域の文物が急激に日本列島に流入する背景の一つには、それまでの百済が独自に克服することができなかつた加耶、新羅と比較して相対的な交通上の不利な条件をその要衝である己汶・帶沙、任那四県の占有と、栄山江流域の前方後円墳の築造勢力を要所に配置することによって克服しようとする政策があつたと解釈したい。

百済が倭王権だけでなく九州北部の豪族勢力を交渉相手とする両面的な外交戦略は、百済の韓半島と日本列島における影響力を強化し、その一方で北部九州勢力にとどても日本列島における影響力を拡大、強化するという、相互の利益にかなつたものであった。

その仲介役を果たした栄山江流域の前方後円墳の被葬者は、百済王権に臣属しながら倭王権と百済王権との外交にあたった、『日本書紀』の欽明紀に見える倭系百済官僚の原型ともいえる。すなわち、江田船山古墳の百済系装身具や銘文大刀と、欽明紀にみられる倭系百済官僚の在り方は、栄山江流域の前方後円墳の被葬者を輩出した九州の有力豪族が、倭王権と百済王権に両属していたことを示唆する。

百済王権が九州地域の豪族を交渉相手として選択したことの背景として、彼らが5世紀後半から瀬戸内海沿岸や山陰・北陸など広範囲にわたる地域勢力間の強固なネットワークを持っていたことが挙げられる。また、畿内の豪族ではない地方勢力が選ばれたのは、やはり倭王権の政策とは無関係に百済王権の意図が働いた結果であつたと考えられる。6世紀前葉における九州勢力のめざましい興起を象徴するのは、北部九州系石室の日本列島各

地への拡散と華麗な装飾古墳の存在である。このことは北部九州勢力が、栄山江流域の前方後円墳の被葬者を媒介として百済の先進文物を受け入れる窓口の役割を担って蓄積した富と情報を起因するのであろう。

百済と倭の本格的な交流が6世紀初頭に始まることや、北陸・近江地域に百済系文物が濃密に分布することは、この時期に新たに台頭する繼体大王を支持する勢力が、それ以前から河内勢力と伝統的に密接な交流関係にあつた加耶勢力を排除し、百済を窓口して先進文物の導入をすすめ、河内勢力をしのぐほどの倭王権内部での優位性を高めていったことを示唆している。

この時期の百済と倭の関係を示す史料が、和歌山県隅田八幡神社に所蔵されている人物画像鏡の「斯麻…遺口中費直穢人今州利二人尊」と刻まれた銘文である。銘文中の「斯麻」という人名は、百済の武寧王陵出土誌石にみる「寧東大將軍百済斯麻王」の斯麻王と一致するものであり、繼体大王に比定する説もある「男弟王」の名も表れる。このように八幡神社鏡の銘文はこの時期の前後における百済と繼体勢力との密接な外交関係を示すものに他ならない。512年には『日本書紀』繼体6年の記事にある、いわゆる任那四県割譲事件と翌繼体7年の己卯・帶沙の事件が発生する。513年、『日本書紀』繼体7年以降、百済は諸博士を倭へ頻繁に派遣する。この時期の百済からの諸博士と文物は、それまでの加耶地域からの生産工人や文物と異なって仏教という高等宗教を伴うものであり、その当時の倭王権がのぞんでいた国家整備に必要不可欠のものであった。

このように百済と倭の本格的な交易は、6世紀前半の繼体朝になってから始まっており、その繼体王権の成立の背景には百済と倭との活発な交渉と何らかの関わりが想定できる。加えて繼体大王の擁立には5世紀後半以降に瀬戸内海沿岸と山陰・北陸などに広いネットワークを築いていた九州勢力が、百済王権との仲介などの役割を果たしたことによって実現したものと推測される。同時に、栄山江流域の前方後円墳被葬者を含む北部九州の有力豪族の対外活動は頂点に達し、ついに倭王権をおびやかすようになった。その結果が、527年に起こった磐井の乱であると考えられる。

栄山江流域の前方後円墳は、磐井の乱の後、538年に百済の泗沘遷都にともなってこの地域が百済王権に直接支配され始めたこと、6世紀前半に大加耶攻略が一段落したことによってその築造が消滅する。

## 2. 新羅と倭

奈良県藤ノ木古墳の馬具は、鞍の中央にある洲浜とその左右の磯金具を一連でつくった一体鞍である点、歩搖付立柱式雲珠や心葉形鏡板轡、鐘形杏葉などが含まれる点、鉤金具が板状である点から、新羅的な特徴を顕著に備えているといえる。また、藤ノ木古墳鞍の後輪に付く三脚把が、慶州市皇南大塚北墳の透彫金銅板皮玉虫鞍の付属具である金銅製異形透彫装飾においてもみられ、金製の鎖飾を嵌入した青琉璃玉も慶州市皇吾洞52号墳の金装刀子の柄頭に付随する金象嵌青色琉璃玉と類似する。三脚把をもつ鞍は、慶州市皇吾洞37号墳、慶山市林堂洞5A号墳、星州郡星山洞38号墳など、5世紀後半の新羅地域の古墳に集中的に副葬されており、これを新羅鞍の特徴の一つとする見解が提示されている。藤ノ木古墳出土品のような華麗な馬具は、その威信財的な性格からみて新羅王権と倭王権間の交渉なしには導入が不可能であったに違いない。

この時期、百済と倭は555年以来、一時的に関係が断絶し、一方で新羅と倭が正式に国交を結ぶ。それは新羅がかつての加耶地域に該当する南海岸の東側半分を支配したため百済と倭の往来が難しくなったことと、新羅が漢江下流地域を押されたことによって、倭との交渉に有利な立地を確保できたことに起因している。

6世紀後半に中国の南朝が滅亡し、政治・文化の中心が華北へと移行するのに従って百済と中国との関係が疎遠となり、漢江下流地域を獲得した新羅が北朝との関係を緊密にしたことによって、倭が百済から導入していた先進文物を新羅から受容することとなったものと推測される。

この時期、新羅産馬具が九州地方に集中的に移入される。福岡県沖ノ島7・8号遺跡の馬具は、金銅製忍冬透彫刺葉形杏葉、鳥人唐草文透彫心葉形杏葉、歩搖付飾金具、イモガイ装飾雲珠・飾金具などで構成されているが、こうした馬具は、慶州市天馬塚、鷄林路14号墓出土品と類似し、また新羅産金製指輪が共伴することから新羅産と見られる。

また、群馬県綿貫觀音山古墳や埼玉県將軍山古墳といった関東地方の大首長墓や、福岡県沖ノ島7・8号遺跡のような国家的祭祀場で新羅産馬具や銅鏡などの威信財が確認されている。韓日間の航路上の祭祀遺跡である沖ノ島で新羅産馬具が奉獻されたことは、この時期の新羅と倭の間で国家間の交渉がなされていたことを示唆する。この沖ノ島8号遺跡出土のササン朝ペルシア凸出円文ガラス碗も、新羅馬具を共伴することから新羅を経由したと考えられる。

6世紀後半の長崎県壱岐島双六古墳で出土した白釉縁彩円文碗は北斎産であるが、慶州市雁鴨池でも出土例がある。また、同古墳からは新羅の土器と馬具も出土しており、白釉縁彩円文碗はやはり新羅を経由してもたらされたと判断される。さらに昌原市鎮海区の石洞遺跡において白釉縁彩円文碗が出土していることもそのことを傍

証している。同じく群馬県觀音山古墳出土の北斉産の銅製水瓶も、新羅の馬具をともなうことから新羅を経由したと推定される。

島根県隱岐諸島の島後、隱岐の島町に位置する大座西2号墳は、小型墳であるにもかかわらず新羅産の銅椀と銅製帯装飾具、鉄矛、鉄斧が出土しており、注目される。新羅産の文物は、古墳の位置や小型墳であることを考慮すれば、日本列島本州から移入されたものとは考え難く被葬者も移住した新羅人の可能性が高い。同じく隱岐諸島の島前、珍岐では新羅土器が出土しており、これにより韓半島東岸の迎日湾-鬱陵島-隱岐-島根を結ぶ航路が存在し活発に利用されていたことがわかる。また、鬱陵島天府洞1号墳から渤海土器である黒色磨研四耳壺が出土しており渤海の対日本遣使路としてもこの航路が利用されていたことが明らかである。

562年の加耶滅亡を前後して、再び新羅と倭の国家間交渉が活発になり、『日本書紀』欽明21年(560)に記事によれば、新羅と倭は初めて国交を結んでいる。一方で、この時期から百濟と倭の関係は20年間断絶する。6世紀後半、新羅は南部加耶諸国を支配下に置き、さらに加耶北部地域の併合を目論むに至って百濟と倭の通交を分断する必要が生じた。一方の倭にすれば、新羅が加耶諸国の併合によって南海岸東部の制海権を掌握したこと、百濟との交通が難しくなった。両者間の交渉はこうした状況に起因する。また、中国の南朝が滅亡して政治、文化の中心が華北に移ったことで、これまで南朝との関係を拠り所としてきた百濟が衰退し、その一方で漢江下流域を確保して西海の制海権を掌握した新羅が北朝と関係を結ぶ。倭が新羅を頼ることになった背景には、こうした情勢がある。

## 7世紀の韓日交流

### 1. 高句麗と倭

5世紀の高句麗と倭の関係は、東アジアにおける北魏を中心とする高句麗・新羅と、宋を中心とする百濟・加耶・倭の同盟との対立の中で形成されたものである。高句麗との戦争で惨敗した後、倭は百濟とともに南朝への遣使を通じた冊封体制のもとでの外交戦を推進する。冊封外交は、中国王朝から認められた唯一の王権であることを国内外に誇示するためのものであった。

478年の倭王武の宋への遣使は、高句麗の侵攻による475年の漢城陥落と関連することは東夷諸国の中で高句麗王のみが認められていた「開府儀同三司」の称号を要求したことからも分かる。倭王武の上表文には高句麗に対する敵対感が見られる。

ところで6世紀後半になると、高句麗と倭の関係に大きな変化が訪れる。『日本書紀』欽明31年(570年)、高句麗が派遣した使者が海を渡り、倭国の西海岸に上陸し、敏達元年(572年)には倭国の朝廷に国書を伝達した後、帰国したという記事がみられる。このような高句麗の倭に対する接近は、高句麗の対外戦略に変化が生じたことを意味する。高句麗はその後も573年、574年に使節を派遣している。

高句麗の対倭外交は、百濟を擊破し大加耶までも併合した新羅が高句麗の領域にまで浸食してきたこと、さらに新羅が中国の南北朝を相手に外交を展開したことを背景としている。すなわち、高句麗は南北朝との友好関係を安定的に維持してきたが、新羅が北朝の北斉と冊封・朝貢関係を結び、南朝の陳にも使節を送ったことでその関係に脅威を及ぼすことになったのである。

570年代の高句麗の対倭外交は、三度(570年、573年、574年)の使節派遣の後、中断され、その後約20年が経過して本格的に再開される。高句麗の対倭外交が一時的に中断された背景には、まさに中国の情勢があった。高句麗が冊封を受けていた北斉の滅亡、北周の滅亡、そして隋の成立である。高句麗は隋の建国以降、ほぼ毎年のように使者を派遣していた。陳が滅亡し、隋が中国を統一したことは、南北分極体制を有利に展開してきた高句麗の外交戦略を覆す新たな脅威の誕生であった。

高句麗の嬰陽王(590~617年)時代における倭に対する多くの人的・物的交流は、『日本書紀』推古紀に詳しく記されており、それを象徴する人物が595年派遣された高僧の惠慈であった。惠慈は倭王権の最有力の執政者の一人である聖徳太子の師であり、隋との倭国の外交にも関与していたと考えられている。

奈良県中宮寺所蔵の「天寿国曼荼羅繡帳」は、622年に亡くなった聖徳太子の極楽往生を願って制作された織物である。この繡帳に描かれた人物は、高句麗風の身幅の長い上衣とプリーツの入ったスカートを着た女性や、ズボンと上衣を着た男性などであり、高句麗文化の直接的な影響をうかがうことができる。

奈良県法隆寺若草伽藍跡で出土した7世紀初頭の彩色壁画片は、金堂または塔が装飾されていたことを示している。若草伽藍の壁画の画師の出自に関連して、玉虫厨子が注目される。玉虫厨子に描かれた絵画や文様は須弥座部の供養図、比丘の袈裟が平安南道双檻塚玄室東壁の女主人公の仏供図の僧侶の服飾と類似している点、飛雲文や蓮花文が平壤市眞坡里1号墳や江西大墓をはじめとする高句麗後期古墳壁画に酷似している点、玉虫厨子須

弥座の床框の縁に描かれたアーモンド形の連雷文が中国南朝に由来し、高句麗古墳壁画に表現されてきた特有の蓮花纹である点などから、高句麗の画師によって描かれたものと考えられる。したがって、若草伽藍の壁画の画師もまた、高句麗人である可能性が高い。また、鳥取県上淀廃寺の金堂壁画には、神将像、菩薩像、天衣、蓮花纹などが見られる。壁画の蓮花纹にもアーモンド形が見られ、法隆寺や玉虫厨子と同様に高句麗系の画師によって描かれたことが推測される。これは上淀廃寺が海を挟んだ高句麗の対岸に位置することとも関係すると思われる。奈良県高松塚古墳の壁画は人物図が平壌の修山里古墳壁画と類似している点から、高句麗系の画師によって絵描かれたと考えられる。

蝦夷穴古墳は、石川県能登島須曾の七尾湾を望む丘陵斜面に位置する。この古墳は『日本書紀』欽明 31 年（570 年）に高句麗の使者がこの地域に漂着した記事が見られる点、海に面した島に単独で位置する点、横穴式石室の玄室の天井の構造が高句麗の隅三角持ち送り技法である点、円頭大刀を佩用している点から、海を渡って移住した高句麗人の墓と考えられる。

唐の太宗は 647 年と 648 年に高句麗を攻撃したが、いずれも失敗し、その後再び攻撃計画を立てたものの、649 年に太宗は死去した。後を継いだ高宗はしばらくの間、国内を固めた後、655 年に高句麗侵攻を開始した。このことが 656 年に高句麗が倭国に使者を派遣した背景と考えられている。

7 世紀後半、福岡県福岡市博多遺跡第 17 次調査の土坑 SK175 から高句麗土器が出土し、注目されている。この土器は、ソウル市峨嵯山堡塁など出土品と胎土・陶符号・器形が類似しており、高句麗で製作されたものである。この土器は、7 世紀後半における高句麗と倭の交流を示す重要な資料である。

## 2. 百済と倭

660 年 7 月、百済は羅唐連合軍によって滅亡したが、661 年福信と道琛は倭にいた義慈王の子・扶余豐を王に擁立し、復興百済国が成立した。百済の要請により、倭は 1000 隻の軍船に 2 万 7 千人の援軍を乗せて派遣した。倭軍は白村江の河口で唐水軍と遭遇し、四度にわたる攻防戦を繰り広げたが、400 隻が沈没した。その後、周留城が陥落し、ついに復興百済国は滅亡した。

7 世紀後半の白村江の戦いは、唐・新羅・百済・倭が参戦した大規模な国際戦争であった。倭は百済を滅ぼした新羅唐連合軍が日本列島を攻撃するのではないかという恐れを抱いており、援軍を派遣したのもこれを未然に防ぐためであった。

高安城をはじめとする西日本各地の古代山城は、百済復興運動の失敗後、その遺民が持っていた技術によって築かれたものであり、瀬戸内海から倭の中枢部に至るルートを防衛する役割を担っていた。その後、百済遺民は日本列島各地に定住した。百済系の人々が畿内地域に集住していたことは、『新撰姓氏録』（815）の内容からも確認される。『日本書紀』には 684 年に百済人の僧俗 23 人を武藏国へ移住させ、687 年に百済の敬須徳那利を甲斐国へ移住させたと記事がみられる。東北地域には、義慈王の王子、善光の後裔である百済王氏が地方官として派遣され、辺境地域である陸奥地域で蝦夷と戦いながら黄金を産出していたのは、百済系遺民の技術者集団を王氏が統制していたためと考えられる。

## 3. 新羅と倭

新羅・唐対百済・日本の外交関係にあった 7 世紀前半のみならず新羅と日本が敵対的関係にあったとされる 7 世紀後半においても、新羅文化が怒涛のように日本列島へ移入されていることは注目に値する。

京都府上賀茂神社の 7 世紀前半のササン朝ペルシャ製ガラス器は、秦氏と新羅の交渉を通じて移入され、その後、賀茂氏に伝えられたと推定される。秦氏の氏寺である京都府広隆寺の半跏思惟像と、慶尚北道奉化郡北枝里仏像、韓国の国宝第 83 号仏像は、服飾などの点から見ると、すべて山東省青州市龍興寺址出土の北齊仏と同系統である。秦氏が手に入れたものであれば、ササン朝ガラス器は北齊を経て新羅に伝わり仏像とともに日本に伝えられた可能性が高い。

7 世紀の新羅の象徴である半跏思惟像は、2~3 世紀のインド・マトゥラー（Mathura）で出現し、パキスタンのガンダーラ地方や新疆を経由して中国に伝來した。新羅は、中国から導入した半跏思惟像を新羅化し、東洋最高の造形美を創出して日本へ伝えた。奉化北枝里石造半跏像は出土地が明確な新羅仏像であり、同様式の韓国国宝第 83 号仏像および日本国宝第 1 号である広隆寺の半跏思惟像が新羅仏像であることを証明する決定的な資料である。特に、広隆寺の半跏思惟像は、慶尚北道北部に自生する金剛松（赤松）で製作されている。当時の日本では赤松を用いて仏像を作ることがないため、広隆寺の半跏思惟像は、様式と材質から新羅からもたらされたもの

であることは明白である。したがって、半跏思惟像はインドから日本に至る壮大なユーラシア・シルクロードの交流を示している（図12）。

7世紀後半、漆谷郡の松林寺五層塔の舍利函からペルシャの円環文琉璃杯が出土した。この円環文は、陝西省の何家村窖藏出土品や奈良県の正倉院所蔵品にも見られる。正倉院の円環文杯は、7世紀においても西域系のガラス器が新羅を経由して日本に伝來したことを示しており、この時期の新羅と日本との関係を象徴する遺物と見ることができる。

韓国、国立慶州博物館の雁鴨池館入口にある連珠獅子孔雀文石は石刻に施された連珠、花樹、獅子、双鳥文などの文様からササン朝ペルシャ系として注目された。大阪府の叡福寺の新羅幡とともに、新羅社会で連珠文織物が広く使用されていたことを証明する。法隆寺に伝來した四騎獅子狩文錦は、從来、遣唐使によって直接移入されたものと考えられてきた。しかし、連珠獅子孔雀文石や叡福寺の新羅幡の存在を勘案すると、このような織物は新羅を経由したものと考えられる。

7世紀初めの新羅と九州との関係を示す資料が福岡県船原古墳の埋納坑から確認され注目される。船原古墳の馬具は、馬冑から壺鑑まで組み合わせで構成されており、その特徴から長崎県壱岐島の双六古墳・笹塚古墳、福岡県沖ノ島7・8号遺跡、奈良県藤ノ木古墳、埼玉県將軍山古墳の出土馬具が新羅産であることを雄弁に物語る。

日本の梵鐘史において名鐘とされる京都府妙心寺鐘は、内面の銘文によって文武2年（698年）に筑前国の糟屋評で制作されたことが判明する。この鐘は福岡県觀世音寺鐘とともに、洗練された姿と優雅な文様で知られ、両者は同時期に同じ工房で制作されたものである。二つの鐘の製作工人は、上下帯の唐草文や撞座の蓮華文の特徴、およびその制作地である糟屋評と隣接する福岡県天台寺の瓦文様や文献史料から、新羅系の移住民であることが明らかとなった。

これまで7世紀前半、すなわち663年の百濟滅亡以前の韓半島と日本列島の関係は、百濟を中心に捉えられてきた。百濟滅亡以後、新羅と日本は敵対的な局面に入ったと考えられてきた。しかし、実際には7世紀前半だけでなく、百濟滅亡直後においても両国間の緊密な交渉が行われていたことが文献史料に見える。特に、『日本書紀』天智7年（668年）条には、新羅使が来日し、中臣鎌足が金庾信に船を送り、さらに天智天皇が文武王に船を送ったことが記されており、王権間の密接な交渉を示すものとして注目される。

7世紀後半、戦争によって唐との外交関係が途絶した日本は、先進文物の導入を新羅に依存せざるを得なかつた。一方、唐との戦争に臨んでいた新羅は、後方の安全を確保する必要があった。また、両者は唐の侵攻を防ぐという共通の事情のもとにあったことを考慮して理解する必要がある。

## おわりにー 古代韓日交流史研究の新たな展望と歴史的な意義

現在、韓半島と日本列島は対馬海峡を挟んで明確な国境を形成している。古代における境界は現在のように明確であったとは言えないが、文献記録とともに葬制や生活様式を考慮すると、海峡を隔てた一つの境界が存在していたことは明らかである。同時に、当時の韓半島内にも高句麗、百濟、新羅、加耶の間にも国境が存在していたが、むしろ韓半島と日本列島の間の境界は、四国の間の国境よりも越えにくいものではなかった点を認識する必要がある。つまり、国家間の関係によっては、韓半島内の陸上の国境が閉ざされ、むしろ海峡を挟んだ倭との国境の方が開かれていることもあると言えることができる。日本列島の倭王権中枢をはじめとする各地域の豪族勢力は、最も重要な必需物資である鉄を韓半島南部に依存せざるを得なかつた。また、権力を維持するための統治機構に関する知識や威信財としての先進文物も、必ず韓半島から導入しなければならなかつた。一方、百濟、新羅、加耶、高句麗は、国家間の抗争を有利なものとするで勝利するためには、必ず日本列島との外交・軍事的同盟関係を良好に維持しなければならなかつた。したがって、古代の韓日関係は常に固定されたものではなく、国際政勢に応じて極きわめて錯綜し、また動的に変化するものであったと言える。

古代韓半島と日本列島の相互関係は、けっして一方的なものではなく、双方にとって絶対的に必要な相互的なものであり、さらにその関係が単なる文物の移動にとどまらず、相互の人的移動と交流を伴っていたことを明確にした。その人的移動は、韓半島からの一方的で大規模な流れだけでなく、時によっては日本列島からの流れも生じる双方の関係であったことが確認された。

最後に古代に韓半島南部を植民地化したとする日本側の一部の認識のみならず、一方的に日本列島に文化的恩恵をもたらしたとする韓国側の一部の認識もまた、歴史的事実とは言えないことを明確にしたい。

以上で見てきたように、古代における韓日両国は敵対関係のもとでの競合よりも、むしろ人と物、情報の交流を通じて相互に発展してきた。交流は、時代を超えて相互理解と発展の基盤となってきたのである。

2025年、韓日両国は国交正常化60周年を迎えた。古代の日韓関係を客観的かつ正確に理解することこそが、現在および未来の両国関係の構築に貢献することを改めて強調したい。

## 参考文献

- 白井克也 1998 「博多出土高句麗土器と 7世紀の北部九州-筑紫大宰・筑紫遷宮と対外交渉-」『考古学雑誌』83-4  
日本考古学会.
- 山尾幸久 1989 『古代の日朝関係』 塙書房
- 金恩淑 1994 「6世紀後半新羅外倭国との国交成立過程」『新羅文化財學術發表會論文集』第15輯慶州新羅文化宣揚會
- 神谷正弘 2002 「藤ノ木古墳出土金銅装鞍について」『考古学ジャーナル』No482 ニューサイエンス社.
- 千賀久 2003 「日本出土新羅系馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学III-交流と交易-』 同成社.
- 大賀克彦 2005 「稻童古墳群の玉類について-古墳時代中期後半における玉の伝世-」『稻童古墳群-福岡県行橋市稻童所在の稻童古墳群調査報告』行橋市教育委員会
- 弓場紀知 2006 「壱岐双六古墳出土の白釉綠彩円文碗-その年代と中国陶瓷史上の位置づけ-」『双六古墳』(壱岐市文化財調査報告書 第7集)長崎県壱岐市教育委員会
- 朴天秀 2007 『加耶と倭』 講談社選書
- 朴天秀 2007 『古代韓日交渉史』 ソウル社会評論
- 李炫姪 2007 「新羅古墳出土 鞍橋手綱試論」『嶺南考古學』41 釜山 嶺南考古學會
- 藁科哲男 中村大 2008 「韓半島玉類의理科学的分析と流通」『湖西地域邑落社会의変遷』(第17回湖西考古学会学術大会)清州 湖西考古学会
- 朴天秀 2009 『日本列島속의 大伽耶文化』大邱 高靈郡・慶北大学校
- 朴天秀 2011 『日本속의 古代韓国文化』果川 真仁真
- 朴天秀 2012 『日本속 古代韓国文化-近畿地方-』ソウル 東北アジア歴史財團
- 梁起錫 2013 『百濟의 國際關係』ソウル 書景文化社
- 高田貫太 2014 『古墳時代日朝関係-新羅・百濟・大加耶と倭の交渉史』吉川弘文館
- 朴天秀 2016 『新羅と日本』果川 真仁真
- 朴天秀 2020 「古代の朝鮮半島と日本列島」『渡来系移住民』岩波書店
- 柳本照男 2022 「5世紀の東アジアと倭政権」『5世紀における倭と東アジア』堺市博物館
- 朴天秀 2023 『古代韓日交流史』大邱 慶北大學校出版部
- 朴天秀ほか 2024 『環東海文明交流史』大邱 慶尚北島・慶北大學校シルクロード調査研究センター.



図 1.4 世紀 東アジアにおける晋式帶装飾具



図 2.5 世紀前葉 高興郡吉洞里雁洞古墳



図 4.5 世紀 京畿道成南市福井洞遺跡出土の埴輪

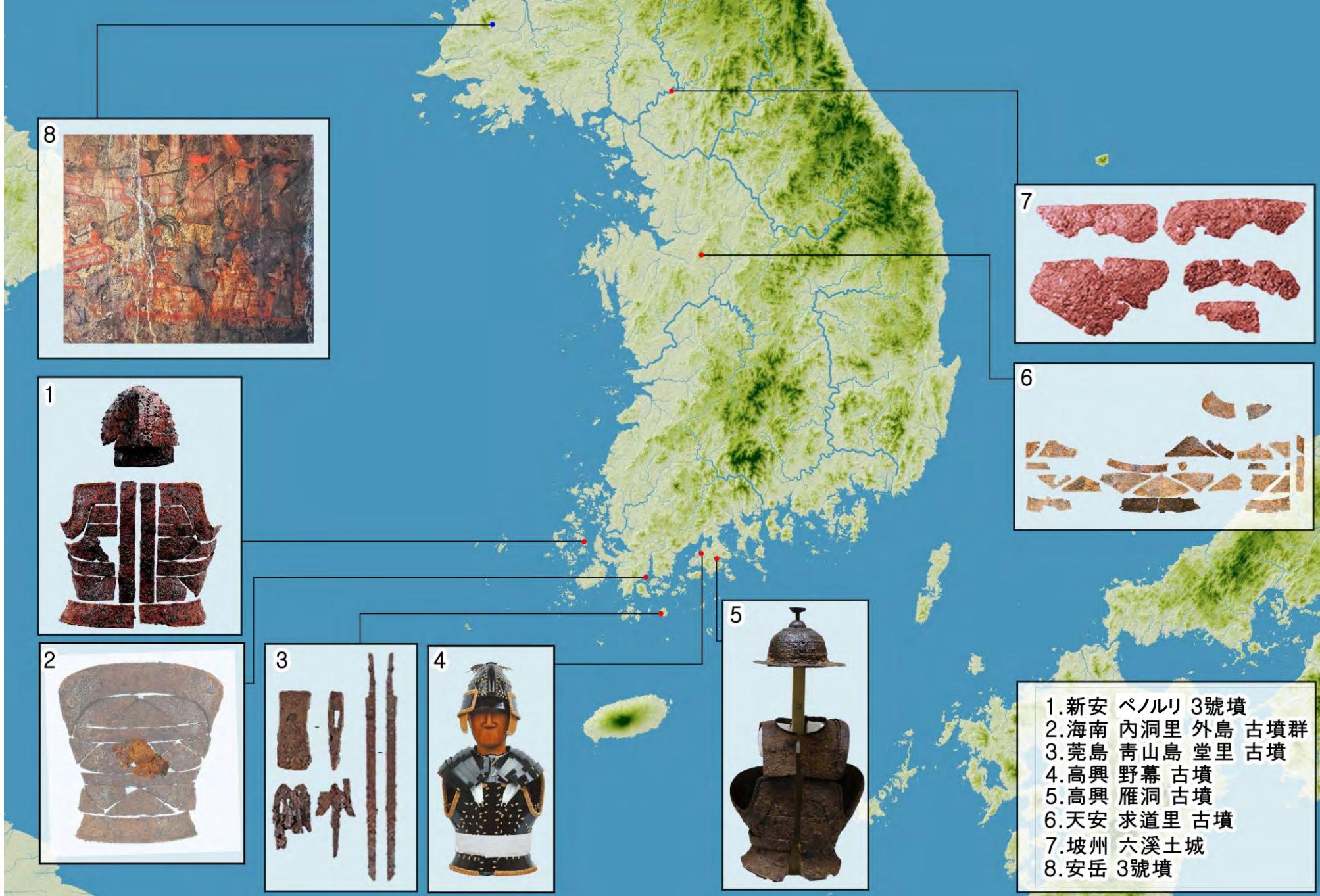


図 3.5 世紀前葉 倭系古墳の分布



図 5.4 ~ 5世紀におけるローマガラス器の分布



図 6.5～6世紀におけるササン朝ペルシアの文物の分布



図 7.5～6世紀におけるササン朝ペルシアガラス玉の分布

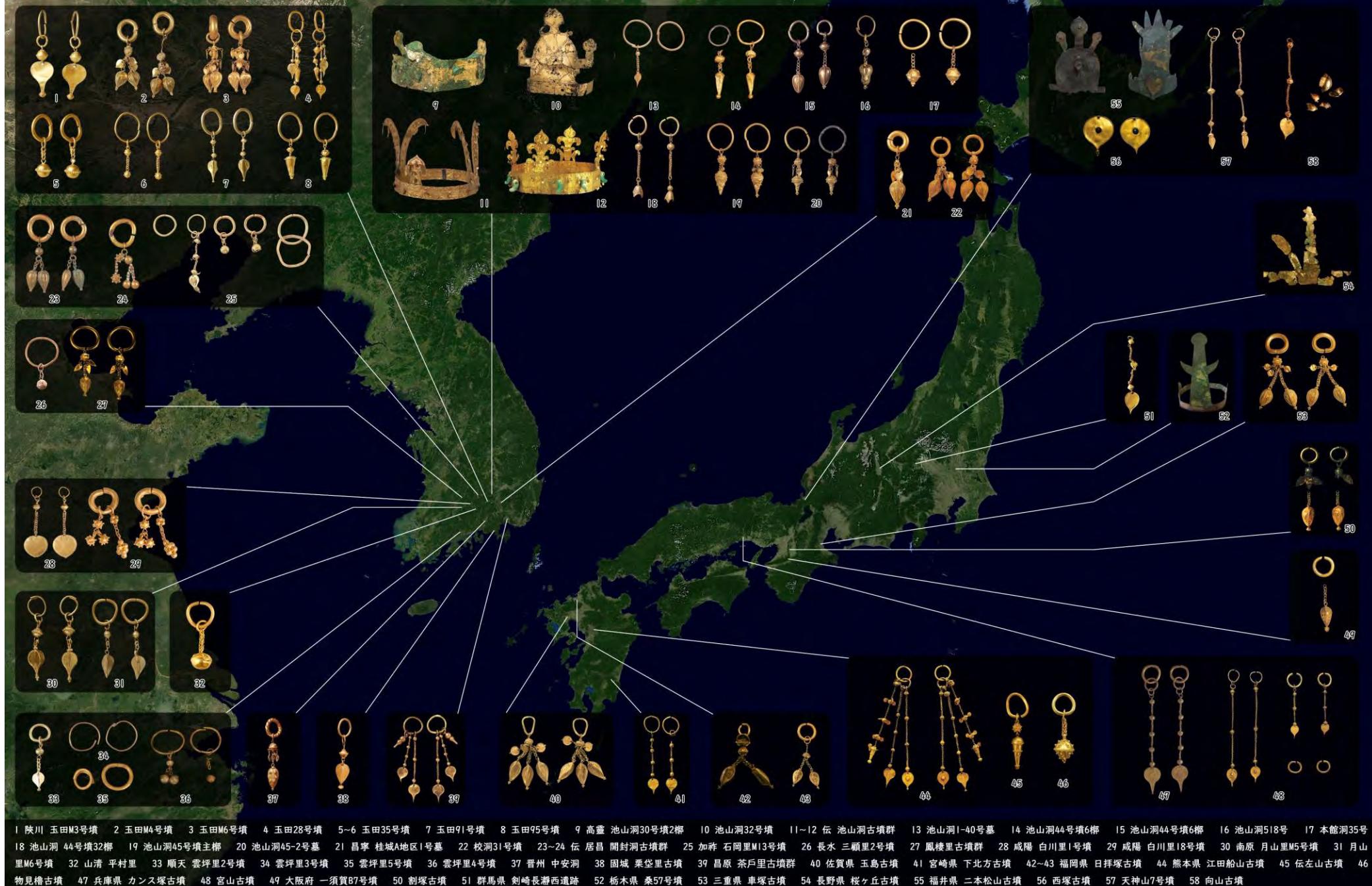


図 8.5 世紀後葉～6世紀前葉における大加耶金工品の分布

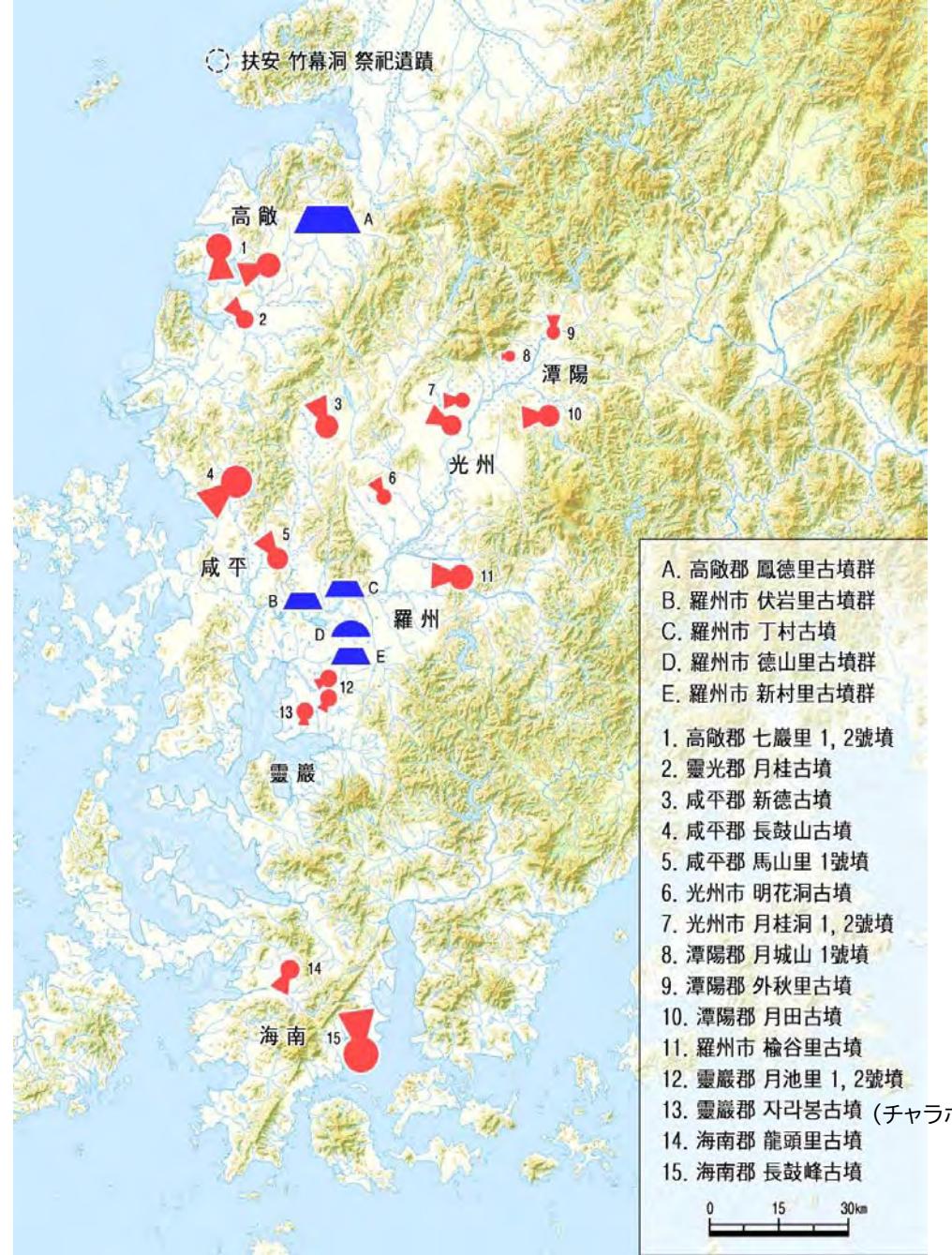


図9.6世紀前葉 栄山江流域における前方後円墳の分布



図11. 6世紀前葉 倭人の首長居館 (海南郡ゴチルマ土城)

	海南				靈巖			咸平			高敞			
	北日面		三山面	縣山面	玉泉面	沃野里	內洞里	泰澗里	古幕院川		咸平灣	咸平川	鳳德里	七巖里
	萬家村	新德												
396년 400년	1號 	2號 	鷹峰						14號 	6號 	2號 	19號 	1號 	3號 
475년 500년		1號 	外島	2號 	新月里 가월마 도성	龍頭里	造山	萬義塚	1號 	3號 	17號 	1號 	2號 	長鼓山
													金山里 마산리	馬山里 마산리
													1號 	2號 

図10.6 世紀前葉 栄山江流域における前方後円墳の出現過程



1. India Mathura 2. Pakistan Takht-i-Bahi site 3. 中國 甘肅省 敦煌市 莫高窟 第275窟 4. 中國 山西省 大同市 雲岡石窟 5. 中國 河北省 邯鄲市 鄭城 北吳莊 遺蹟  
 6. 中國 山東省 青州市 龍興寺址 7. 韓國 慶尚北道 奉化郡 北枝里寺址 8. 韓國 國寶83號 9. 日本 京都府 廣隆寺

© 2023. Park Cheun Soo and Bae No Chan all rights reserved.

図12. 6～7世紀における半跏思惟像の東伝